

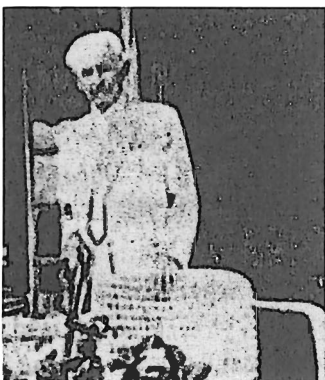
でオーソドックスなドイツ語の教科書をはじめ辞書や参考書を多数所蔵しているのは熊本大学の誇りだ。五高の遺産は決して漱石やハーンだけではない。

## 七高教師クレスラー

七高造士館には発足時に二人の傭外国人教師がおり、共に日本学者であった。一人はマードックという英国人で、主に日本史を研究し、もう一人はグラマツキーというドイツ人で古今集の独訳などの業績のある人である。マードックは一高時代に漱石に英語を教えた人としても知られている。さて、この二人に遅れること7年、明治41年（1908）に独語とラテン語の教師として七高に赴任したオスカル・クレスラー（Oskar Kressler）も後年有力な日本学者となった人である。特に、現在ドイツにおける日本研究の一拠点となっているボン大学の初代日本学の教授に就任し、その昂揚に尽くした功績は記憶されるべきである。

最初に、現在ボン大学に保存されているクレスラーの人事記録に収められている自筆の履歴書（Lebenslauf）を紹介しよう。これはクレスラーがボン大学の員外教授に就任する際に作成されたものである。

「私アウグスト・エドアルト・オスカル・クレスラーは、1876年4月16日、当時郵便書記官で後に郵政局長となった父オスカル・クレスラーの息子としてコンスタンツ（バーデン州）に生まれた。故郷の町で1884年まで小学校に通い、次いで1884年から87年までアーヘンの小学校及びギムナジウム、1887年から90年までコルマルのリツェウム（ギムナジウムの上級学年）、そして1890年から96年までハルツ山麓のヴェルニゲローデのギムナジウムにそれぞれ通学し、1896年同地でギムナジウム卒業証書を授与された。1896から1897年まで2学期ライプツィヒ大学で学び（東洋学・古典文献学・哲学）、1896年の夏学期はジュネーブ大学に学び、1897年から1904年までシュトラースブルク大学にあり、同地で学位（サンスクリット・トルコ語・宗教哲学）を得た。1904年から1906年までフランクフルト・アム・マインの某家の家庭教師を勤めた。その後再びシュトラースブルク大学に戻り、1908年5月8日に高等教職の国家試験（上級フランス語・中級ドイツ語・英語）に合格した。同時に（1907年9月から1908年の4月



クレスラー

まで）シュトラースブルクのサント・ヨハン実科高等学校の学術臨時教員になった。1908年9月以来、高等学校教員（独語・ラテン語）及び1923年から1929年までは大学講師（独語・ギリシャ語）として日本政府（鹿児島及び浦和の高等学校、東京帝国大学、法政大学、陸軍士官学校）に雇用された。1929年秋より1932年春までボン大学東洋語科日本語講師。1932年2月20日同大学の日本学教授資格を取得、1933・34年の冬学期以来、日本学の講師を依頼された。1908年以来、既婚」

この履歴書によると、クレスラーが日本語や日本文学に興味を持ち、学び始めたのは、七高の教師となって来日してからの

ことであろう。その意味で鹿児島時代は彼の日本学者としての基礎を作った時期に当たる。その期間は、前任の女性教師ゾフィー・ビュットナーの後を承けて来鹿した1908年（明治41）から浦和高校に転任する1923年（大正12）までの約15年に及ぶ。

天野貞祐に「ドクトル・クレスレルのことなど」（『忘れえぬ人々』所収）という文章がある。天野は京大哲学科を卒業後、大正3年から8年まで七高の独語教授を勤めたことがあったが、その時代にクレスラーと知り合った。「初めてクレスレル氏を見た時、如何にも学者らしい上品な人柄をうれしく思った。訪問してもよいかと尋ねると、是非来てくれ、ということで訪ねた最初の時から、話が合って愉快であった。彼は毎週一回会合して一緒に勉強しないかと言うのでわたしは文字通り快諾した」。こうして二人は日本語とドイツ語の交換教授をするようになった。クレスラーは黄表紙や漱石のものなどを読んでいた。天野はカントの『純粹理性批判』の翻訳に取りかかっていたので、根ほり葉ほりいろんな質問をした。天野によると、クレスラーは「外人教師は生徒の為めよりはむしろ教師の為にいるのだから、少しも遠慮なく何んでも問うてくれ」と言っていた。実際彼は昼休みにも、10分の休みにも、天野がどんなにしつこく質問しても一度も厭な顔をしたことがなかった。そういう次第で二人は日と共に親しさを増し、週一回の勉強日も2回、3回となり、土曜日の午後などは錦江湾を見下ろせる風光明媚な吉野山へ散歩を試みたりした。勉強日には連れだって散歩をするのが常で、散歩道はいつも同じで「哲学者道」と名付けていた。これはハイデルベルクにある有名な「哲学者道」になぞらえたものであった。

クレスラーと日独両語の交換教授をしたのは天野だけではなかった。やはり当時七高の独語教授をしていた独文学者の吹田順助もそうであった。彼の自伝『旅人の夜の歌』にそのことが書かれている。吹田はクレスラーにヘッベルの『ギューゲスと彼の指輪』の不審の箇所について質問し、その代わりに吹田は西鶴の『五人女』を彼のために独訳しながら読み進めた。「私はその後一年ばかりの間に『ギューゲス』の翻訳を終ったが、これもクレスラー君の協力の賜物であったように思う」と吹田は述べている。

だが、七高時代クレスラーに語学上最も多く教えられたのは天野であったことは、彼の代表的訳書『純粹理性批判』の後書き読めば明らかである。

「私はまたドクトル・クレスレルから少なからざる助力をうけた。上巻は私が第七高等学校奉職中（中略）に成立したものであるが、氏を同僚としたことは私の図らざる幸福であった。私は数年の間毎週二回多きは三回氏と会合し、氏の日本語研究を助けると共に私はまた様々な疑問をもって氏をわずらわした。私の問いに対する氏の解明は懇切熱心倦むを知らなかった。一小詞をも忽がせにせざる氏の誠実周密な解釈によって私は実に多くを教えられたのである。今や故国に帰ってボン大学に日本語を講じつつあるこの友人を私は感謝の情なくしては思いやることができない。」

天野の「ドクトル・クレスレルのことなど」によると、クレスラーは実に正直で善良な人物であったが、ドイツ人が一般的に持っている弱点を見せることもあったようだ。第一次大戦が勃発し、英独間で戦争が始まると、七高のエルダーという英人教師は冷静そのものであったのに対して、クレスラーはそれまでは彼と親しくしていたが、露骨に敵意を示すようになったという。

第一次大戦では日本は日英同盟の約定により、対独宣戦を行ったが、ドイツ教師は留まるこ

とが許された。しかしドイツ人は当時敵国として難しい立場にあった。それでもクレスラーは平生善良で、良き教師として認められていたので、さしたる反感も買わずにすんだ。彼は天野に「エルダーはあんなに冷静を装っているけれど、かれの握りつめた拳は怒りにふるえているに相違ない」と言っていた。

さてその後、クレスラーは1923年（大正12）に七高から浦和高等学校に転任し、横浜に住んだが、関東大震災で彼の家は崩壊した。その時真っ先に彼を援助したのは、鹿児島時代に彼が非礼の数々を敢えてしたエルダーであった（エルダーは当時三高教師で京大講師を兼ねていた）。非礼に報いるに恩恵をもってする義拳に対して、クレスラーはすっかり感激した。これがきっかけで二人の仲も修復した。クレスラーは1929年（昭和4年）20年余を日本の高等学校の教師として過ごした日本を去って帰国し、ボン大学の日本学講師となった。帰国の途次京都に立ち寄り、三高外人宿舎にエルダーの客となり、天野貞祐もそこへ招かれ、ともども鹿児島時代の思い出話をした。その時のことを天野は「かつては握り拳を固めた人達も今は兄弟として、むしろ肉親の兄弟以上の関係において、実になごやかに心から心への言葉を交わし、別れを惜しんだ。これは英人の寛容と独人の率直という徳の生み出した幸福でわき目にも実にくるわしく感ぜられた」と書いている。

天野はクレスラー夫人からもいろいろなことを教えられた。「夫人は美しい聡明な典型的ドイツ婦人であった。わたくし達の親しい交わりも彼女の聡明な配慮に負う所が極めて多い」と天野は語っている。夫人はマリー・ブルクマンといい、夫より7歳下で、来日直前の1908年5月に結婚し、一男一女があったが、いずれも日本滞在中に生まれた。天野が書いているエピソードをひとつ紹介しよう。

クレスラーが東京に移り、士官学校の講師をしていた頃、病気のため一時夫人が代理で授業を受け持ったことがあった。ところがもともと利発な人だけに授業が上手なために夫婦ともに講師に頼みたいと懇請された。だが、夫人はどうしても辞退して承知しなかった。その理由は自分は教員免状をもっていない。免状なくしては講師になれない、ということにあった。教育には十分な知識と訓練を要するということが心にしみ込んでいたのだ。このような彼女の教育に対する真剣な態度には学ぶべきものが多いと、天野は思ったのである。

さて、クレスラーは帰国後、ボン大学東洋文化研究所に設置された日本学科の最初の講師となり、1932年には中江藤樹に関する論文で日本学の教授資格（Habilitation）を取得した。なおこの年、ドイツ留学中の松本徳明（仏教学者、後京都大学教授）が、クレスラーに次ぎ2人目の日本学講師となった。1939年にクレスラーは員外教授になった。

クレスラーは第二次大戦後も引き続きボン大学の日本学科主任教授を勤めた。1946年ボン大学は戦後ドイツで初めて日本研究のコースを再開したが、それにはクレスラーの尽力によるところが大きかった。

彼は1949年（昭和24）10月1日付でボン大学教授を退職した。そして翌年1月にはボンを去り、子供たちの住むチリに移住した。サンチャゴに1956年6月までいたことは確かだが、その後まもなくして香港で亡くなったという。

主な論文・著書には「邯鄲の枕」（1935）、「もののあわれ」（同）、「日本人の国民性」（同）、「日本文化史」（1936）、「藤樹先生」「日本国家の生成」（1939）等があり、ほかに日本文化の本

質、特に仏教や禅に関する論文が多数ある。

クレスラーの功績として次の4点が挙げられるだろう。

第1は、日本の高等学校や大学で20年余にわたり教鞭を執り約5000人を教えたこと、第2は天野貞祐や吹田順助など同僚たちに助言を与え、彼らの研究や翻訳を支援したこと、第3に日本文化史や中江藤樹などの研究によりドイツの日本学の発展に貢献したこと、第4に今日のドイツ語圏で日本研究の拠点になっているボン大学日本学講座の基礎を築いたことである。

## ターラント林科大学と鍋島直縄

子爵で後年貴族院議員になった鍋島直縄（なべしま・なおただ）は旧肥前鹿島藩の第十四代当主であった。1889年（明治22）5月6日に侯爵鍋島直大の二男として生まれた。兄は後の侯爵鍋島直映。直縄はのち明治30年4月鹿島藩先代の鍋島直彬（なべしま・なおよし）の養子となった。直彬は学を好み、文武の道を奨励し、維新の際は宗藩主鍋島閑叟を助け国事に奔走し功績があった。明治5年渡米して諸制度を視察して翌年帰国。その後侍従、沖縄県令、元老院議官等を歴任し、明治17年に子爵を授けられた。その後貴族院議員に当選すること数回に及び、また錦鶏間祇侯を仰せ付けられた。日露戦争での功により勲二等瑞宝章を授与された。1915年（大正4）6月病没。

さて、鍋島直縄は1908年（明治41）東京外国語学校独逸語科本科に入学した。当時の同校の独語科には教授として山口小太郎、水野繁太郎の両大家に加えて、天才ドイツ語学者として知られた大津康がおり、それに助教授には外語始まって以来の秀才を謳われた気鋭の田代光雄もいた。文字通り当時の日本を代表するゲルマニストが揃っていた。それに加えて、ドイツ人教師にベルリン大学出のDr. Phil. ワルテルがいて熱心に学生たちを指導していた。こうした優れた教師たちに教えを受けた直縄は幸運だったと言えよう。そこで養成された語学力は必ずやドイツ留学に際して威力を発揮したであろう。ちなみに、同級には後年独文学者として活躍した道部順がおり、2級上には独語学者として盛んに活躍した粕谷眞洋や小柳篤二がいた。直縄は1911年（明治44）3月卒業し、その年の内に早くもドイツに留学している。はじめベルリンに滞在したが、直ぐにドレスデンに移り、1912年（大正1）10月16日から1914年（大正3）3月まで当時のターラント王立ザクセン林科大学（Königliche Sächsische Forstakademie zu Tharandt）に留学した。该校はドレスデンにほど近い小都市ターラントに1811年に創立されたもので、林科大学としては世界でも最も古いものの一つであった。現在この林科大学はドレスデン工科大学の林学科になっている。同工科大学の文書館には鍋島直縄の留学時代の資料が保存されている。それによると直縄は聴講生としてではなく、正式な学生として入学が認められそれは、入学に際してベルリンの日本大使館が発行した証明書に基づき、学長 Beck 教授、副学長の Martin 教授及び GroB 教授が入学を許可した結果だった。

直縄は3学期にわたって在学し、次のような講義を聞いたことが分かる。

1912年から13年に至る冬学期：Hans Wislicenus 教授（化学的森林技術、化学実習Ⅲ、煙